

シンポジウム 「ポピュリズム vs. 知性？」 ——政治的世界の分岐点を問う」

【趣意書】

「民主主義って何だ？」

こうした根本的な問いが改めて強調されること背景には、民主主義そのものが危機に瀕している日本の政治状況があり、その中心に安倍政権が存在する。

安倍政権は自公の圧倒的数的優位をもとに、2013年の特定秘密保護法案、2015年の集団的自衛権の行使を容認する安全保障関連法案という、それ自体が日本の民主主義を脅かす法案を次々に強行可決してきた。また、原発再稼働の決定、沖縄県の辺野古埋め立ての決定も「粛々」となされている。周知のように、これらの動きには、かつてないほどの強い批判と運動が広範に起きている。にもかかわらず、それらすべてを無視して強行する安倍政権の姿勢そのものが「民主主義の危機」なのであり、「民主主義って何だ？」という怒りの問いを生みだしている。

民主主義への危機感を醸成するのは、安倍政権の動きにとどまらない。むしろ、2000年代から作られてきた民主主義を掘り崩す政治状況のうえに、安倍政権の強権的姿勢が形成されていると見たほうがよいだろう。なぜなら、2000年代における右翼ポピュリズムの社会的蔓延が、安倍政権の大きな基盤となっているからである。

石原慎太郎、小泉純一郎、橋下徹といった右翼ポピュリストらが繰り返してきた手法、すなわち、誤った対立軸を演出し、民衆の怒りを煽り、その矛先を「既得権益層」に向けること、その際一切の対話を無視して強行していくという手法そのものが社会的に蔓延している。ヘイト・スピーチに代表されるようなむき出しのレイシズム、公共空間における権利侵害に加担するような暴力的な言説の広がり、そしてそれを許容する無自覚な差別意識…。これらの政治的基盤のうえに安倍政権の今がある。

こうした動向に共通するのは、権利や法に関して集積されてきた知に対する軽視であり、他者の意見の切り捨てである。こうしたプロセスとも呼べないプロセスを経て、自分たちの思い通りの行為を強行する。他者（とくに少数者・弱者）の権利に対する尊重、これまで積みあげられてきた議論や知への敬意、他者との対話の尊重といった、民主主義を構成する諸要素をかなぐり捨てるような、現在の政治状況はまさに民主主義の危機を示しているといえるだろう。

日本の政治的世界が分岐点に立っているなかで、民主主義の危機を生みだしている政治状況を多側面から把握し、それに対抗するための手立てを打ち立てる必要がある。

《シンポジウム》
ポピュリズム vs. 知性？——政治的世界の分岐点を問う

では、上記のような政治的統治手法をいかにとらえればよいのだろうか。ここで注目すべきなのが、橋下徹の台頭や安倍政権の暴走のなかで、増加してきた「ポピュリズム」や「反知性主義」という言葉と、それをを用いた形で政治・社会状況を分析する言説である。実際、出版数でみると、「ポピュリズム」をテーマにした本は橋下徹の台頭以降急増しており、そして、第2次安倍政権の発足以降は「反知性主義」をテーマにした本が急増している。内容も橋下や安倍政権を意識したものがほとんどで、「反知性主義」に関してはたとえば以下のような紹介文がカバーに載る。

「集团的自衛権の行使、特定秘密保護法、改憲へのシナリオ・・・あきらかに国民主権を蝕み、平和国家を危機に導く政策が、どうして支持されるのか？その底にあるのは、『反知性主義』の跋扈！」（内田樹編『日本の反知性主義』晶文社、2015）

「いま、日本には『反知性主義』が蔓延している。（中略）実際、その動きは安倍政権下で顕著だ。麻生副総理の『ナチスの手口に学べ』発言や、沖縄の基地問題を巡る対応などに、それは現れているといえるだろう。」（佐藤優『知性とは何か』祥伝社新書、2015）

これらの言説の多くは、橋下徹や安倍政権の言動とそれを支持する社会状況という両者を、「ポピュリズム」や「反知性主義」として批判的にとらえるものである。そしてその前提には「ポピュリズムvs.知性」、「反知性主義vs.知性」という対立構図が存在する。

しかし、はたしてこのような構図で、この間の政治的世界をとらえてよいのだろうか。

まず、指摘できるのは、「ポピュリズム」をすべて批判することの問題性である。そもそも、「民衆」に由来する「ポピュリズム」は全面的に批判されるべきものではない。「ポピュラーなもの（民衆的なもの）」には多面性があり、民主主義の芽生えの契機となるものが多様にある。政治的世界に目を向けても、たとえばスペインにおけるPOD EMOSのような左派ポピュリズム、沖縄における人民・民主主義的ポピュリズムなど、民主主義の成熟に貢献する潮流も存在する。ポピュリズムを全面的に批判する観点では、たとえば、反原発運動「ポピュリズム」として冷笑的にとらえる言説も多数あるように、民衆に根差した活動それ自体も否定的に扱われてしまうことも生じ得る。ポピュリズムを正当に評価するためにも、ポピュラーなもの（民衆的なもの）の意義と積極性を引き出す必要がある。

「反知性主義」批判に含まれる民衆蔑視の問題性も指摘しなければならない。反原発運動の一部を「タロー族」として括りそれを「反知性主義」として批判する言説や、

《シンポジウム》
ポピュリズム vs. 知性？——政治的世界の分岐点を問う

「ヤンキー」、「DQN」、「中二病」という形で若者たちを「反知性主義」として揶揄する言説などが例としてあげられよう。こうした「反知性主義」批判の多くに共通するのが、支配的・権威的な「知性」を望ましいものとしておき（たとえば、前掲の佐藤優が重視する「知性」とは、国益に資する現実主義的「インテリジェンス」である）、それ以外の「知性」を無視する形で、対象における「知性の欠如」をあげつらうという手法である。そこでは、民衆は迷信に惑わされ、たやすく情動にとらわれる群衆として描かれるが、これは、民衆に存在する独自の知性の形態を「知性」として認めない操作以外の何ものでもない。

このように考えるならば、「ポピュリズムvs.知性」、「反知性主義vs.知性」といったとらえ方自体、再考を迫られることとなるだろう。むしろ立てられるべき問いは、知のあり方が大きく変容した社会において、民衆のためのポピュラーに根差した「知性」とは何か、民主主義の危機に対して抵抗の拠点となり得る「知性」とは何か、という問いである。

この問いを中心に、本シンポジウムでは、本テーマに関わる3人の専門家に報告をいただきながら議論を深めていきたい。報告者として鈴木宗徳氏から、左派ポピュリズム運動が拠り所にすべき「知性」とその可能性について、杉田真衣氏からは、高卒単身女性たちへのインタビュー調査や金沢でのホームレス支援活動の経験をふまえて、そうした人々から汲みとれるポピュラーに根差した「知性」について、竹内真澄氏からは「現代の階級と言葉」について、それぞれ論じていただく予定である。